

札幌市博物館活動センター 情報誌 ミューズ・レター

# Muse Letter

No.78  
February 2023



## 博物館活動センターに現れたキタキツネ

イヌ科<sup>ほにゅうるい</sup>の哺乳類で、北半球に広く分布するアカギツネのうち、北海道からサハリンに生息するものが亜種キタキツネとされています。春～夏にかけて親子で現れ、じゃれあったり毛づくろいしたりするなど、愛くるしい姿を見せてくれます。写真は冬毛のキタキツネで、駐車スペースの雪山に座っているところを撮影しました。

※寄生虫エキノコックスの宿主なので、実物のキタキツネには近づいたり触れたりすることは避けましょう。

# サッポロカイギュウの20年

文/学芸員 古沢 仁



2003年に「サッポロカイギュウ」が発掘されて今年で20年になります。そこで、あらためてサッポロカイギュウについて考えてみました。

カイギュウ類は現生するジュゴンやマナティーを含む哺乳類の一群「カイギュウ目」を形成し、姿かたちはクジラに似ていますが、その起源は異なります。クジラは偶蹄類と近縁で、現生ではカバに近いとされる一方、カイギュウはゾウの仲間「長鼻目」と近縁です。

そもそも、地球上の生命は、今からおよそ40億年前、海の中で誕生しました。およそ3億6500万年前には両生類が陸上へ進出しました。

生命が上陸するためには、さまざまな能力を獲得する必要がありました。体を支えるための丈夫な骨格と移動の方法、肺を使った呼吸法、さらには乾燥した環境に進出するために、体の表面から水分が失われることを防ぐ皮膚や、眼の乾燥を防ぐための涙腺、体の水分を失わないための排泄方法、安全かつ確実に子孫を残すための体温や胎盤などです。そして、今からおよそ2億3000万年前に、生命は陸上での生活に最も適応したといえる哺乳類へと進化します。

本来、陸に適応した哺乳類が水中の生活に戻るためには、あらためて「呼吸」「摂食」「移動」

「体温」などについて、いくつかのモデルチェンジを行う必要がありました(上図)。

例えば、空気より800倍も重い水の中で動くためには、後足を退化させ、紡錘形の体で水の抵抗を減らす一方、前足と尻尾の先端をヒレ状にするとともに、長い尻尾を力強く上下に動かす筋肉を支える骨(V字骨)を獲得しました。また、頭を大きく動かさなくても楽に呼吸ができるように、鼻孔は頭の高い位置に移動しました。ここまではクジラとカイギュウで共通して見られる特徴で、体形が似ている理由はここにあります。異なるのはクジラ類が魚やエビ、イカなどをほぼ丸のみする肉食であるのに対し、カイギュウ類は海底に生える海藻(草)類を咀嚼して(すり潰して)食べる草食であることです。

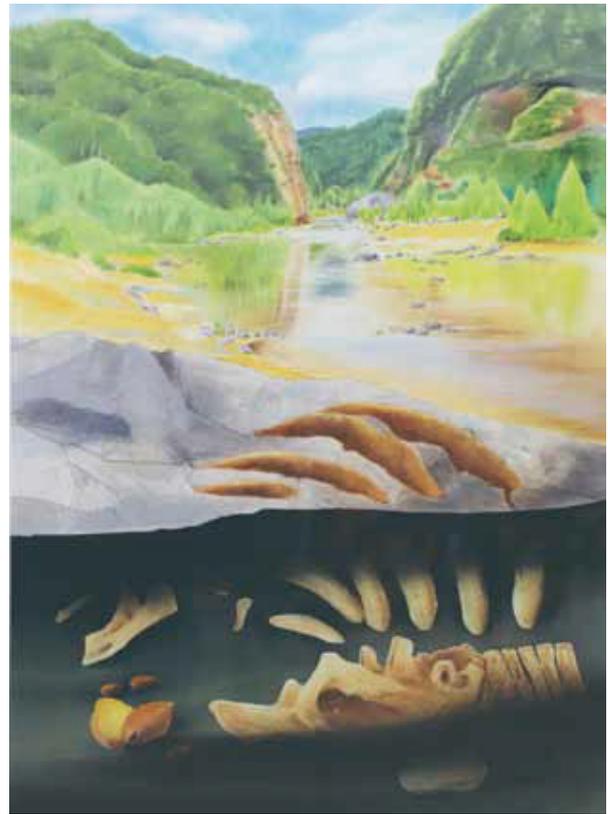
カイギュウ類は、肋骨の数を保ちつつ、骨全体を太く重くすることで、体を安定させて水中に沈んでいられます。それにより、水中での食事も楽になりました。また、海藻(草)類を捕食する敏感で器用な吻部(くちびる)は近縁のゾウの鼻に似ています。さらに、突起の少ない大きな体は熱が奪われやすい水中で体温を保つのに役立ちました。

陸上に上がった脊椎動物の歴史(3億6500

万年)を私たちの一生(100年)に例えると、両生類が哺乳類へと姿を変えた2億3000万年前はおよそ37歳にあたります。その後、クジラとカイギュウの仲間が水に戻る、今からおよそ5300万年前は、85歳のこととなります。ようやく手に入れた陸での生活を捨て「明日から海で生活する」と宣言する85歳が身近にいたら、必死で止めるに違いありません。

なぜ彼らは水中に戻っていったのでしょうか？よほど水中が魅力的だったのでしょうか？それとも陸上にいられない理由があったのでしょうか？

ちなみに、カイギュウの中でも大型化したサッポロカイギュウの登場は、この例えでいうと97歳。そして、私たちがカイギュウを発掘・研究してきた20年は最後の3分弱にあたります。



地下に眠るサッポロカイギュウ (画/学芸員 古沢 仁)

ホット  
コラム

## 展示室につき

学名は世界共通言語!?

○月×日 展示解説員 首藤 昌子



パキデスモセラス、テトラゴニーテス、ポリプチコセラス…。これはアンモナイトの学名の一部(属名)で、多くの化石の場合、学名がそのまま日本語のアンモナイトの名前として使われます。なんだかなじみのない音の羅列なので、標本ラベルをみて「読みにくい!」「これは『アンモナイト』じゃないの?」と言う人も多くいます。

化石を含め、これまでに人類が発見した全ての生物には、世界で共通のルールに従い、ラテン語で学名が付けられています。

札幌市の木であるライラックは英語名です。日本語名(和名)はムラサキハシドイ、フランス語名ではリラといえます。しかし、学名の *Syringa vulgaris* なら、世界共通なのです!

でも、学名を知っていることが大前提なので、伝わる人の方が少ないかも…。

さらに、学名のラテン語を調べると、色や形などの特徴や、標本を見ただけでは分からない産地や発見者の名前などの情報が分かります。博物館見学の楽しみがひとつ増えるかもしれません。



写真:当センターに展示されているアンモナイト(高橋寛氏寄贈)  
ラテン語を調べると、セラスは角、イテスは石という意味がある。  
ラテン語発音のカタカナ表記は書籍等で一部が異なる場合があります。

# コレクションクエスト

ふだん公開していない  
収蔵物を紹介します。  
さあ、標本の世界を冒険だ!

博物館活動センターでは、2016年から毎年秋に西岡公園でキノコ観察会を行っています。観察用に採集したキノコは、博物館の標



標本No.SMAC-F-715  
ニシオカトマヤタケ:縦半分<sup>どつてい</sup>に切断しており、もう片方は北海道大学総合博物館の標本庫に収蔵されている。

本にするため、その日のうちに講師が種類を調べて同定<sup>どうてい</sup>します。生の胞子を顕微鏡で観察しなければ分からない場合もあるからです。その中で、2016年に採集した小さなキノコは日本初の発見となりました。和名ニシオカトマヤタケとして報告され、その標本が当センターに収蔵<sup>しゅうぞう</sup>されています。キノコ観察会には、まさに標本をコレクション(収集)するために、参加者も一緒にクエスト(探索)するという裏ミッション(?)があるのです。

文・写真/学芸員 山崎 真実

**File No.14**  
原点回帰～体験することの大切さを改めて実感

## SMAC活動レポート

当センターで行われる、市民の自主的活動や、学校との連携など、さまざまな活動を紹介します。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため中止していた体験学習会を2022年に再開。公園内の植物を観察し、その生態や観察地の環境の移り変わりなどを伝える「ぶらりネイチャー」、現地を歩きながらその土地の自然や歴史、地形を学ぶ「おさんぽミュージアム」はいずれも大盛況でした。当日は久々の実施とあってか、解説をする学芸員も緊張していた様子でした。参加者からは「この植物がここで繁栄した背景を知ることができて良かった」「街並みの見え方がこれまでと変わった」などの声が寄せられました。展示や講座だけでなく、実際にみて・きいて・ふれて・体験することの大切さを改めて認識した体験学習会となりました。

博物館活動センターではこれからも自然史の視点から調査研究を進め、札幌の自然の魅力や独自性を広めていく活動に取り組んでいきます。



写真上:ぶらりネイチャー(月寒公園)、下:おさんぽミュージアム



- 交通アクセス**
- 地下鉄南北線「澄川駅」北出口から徒歩約10分
  - 地下鉄南北線「南平岸駅」東出口から徒歩約14分

### 札幌市博物館活動センター information

入館料:無料  
開館日:火曜～土曜 開館時間:10時～17時  
休館日:日曜・月曜、祝日、年末年始(12月29日～1月3日)



ホームページアクセス  
二次元コード



発行 札幌市博物館活動センター

〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6 Tel: 011-374-5002 Fax: 011-374-5014  
Email: museum@city.sapporo.jp ホームページ: <https://www.city.sapporo.jp/museum/>



ミュージック・レターは、植物油インキおよび、環境省が定める「グリーン購入法」の適合紙を使用しています。